

目次
総会案内 1
植樹祭案内 1

平成18年度総会のご案内

2
美しい風景を子供
たちに
坂田 成夫

NPO森を再生する会会員 各位

NPO森を再生する会 理事長 神谷輝幸

平成18年度特定非営利活動法人森を再生する会総会のご案内

2
子どもたちの声
田中 常和

早春の候、貴殿におかれましては、ますますご健勝のこととお喜び申し上げます。平素は本会の活動に格別のご高配を賜り、厚くお礼申し上げます。

2
今年の夢
大崎 かおり

さて、平成18年度総会を、下記の通り開催しますので、万障お繰り合わせの上、ご出席くださいますようお願い申し上げます。また、会員以外の方も当日受付を行いますので、お誘い合わせの上、ご参加いただけますようお願いいたします。

3
森は生きている
杉本 勝

なお、ご欠席の方は、委任状に記名・捺印の上、総会開始前に当日受付か、事務局(榊原和久〒445-0865西尾市本町30)までお届けいただけますようお願いいたします。

記

3
尺アマゴの棲む谷
斉藤 和彦

1. 日時 平成18年4月22日(土)午後6:30

2. 場所 安城市民会館第四会議室(3F)

〒446-0041 安城市桜町18番28号

TEL:0566-75-1151

3
昔の山に戻りたい
三浦 進

3. 議題

(1) 第1号議案 平成17年度事業報告について

(2) 第2号議案 平成17年度収支決算報告について

第3号議案 平成18年度事業計画について

第4号議案 平成18年収支予算案について



4
自然豊かな森づくり
江坂 慎也

4
まちにも豊かなみどり
を
杉浦 彦展

春の植樹祭のご案内

5
海へ
草薙 玲子

とき:平成17年5月4日(木)10:00-15:00

ところ:愛知県北設楽郡設楽町大字田峯字西川16番地

NPO森を再生する会「水源の森」

参加費:500円(ボランティア保険、高原牛乳・シシ鍋の汁物代)

バス代:1,000円(高校生以下は500円)

安城学園高校前8:00出発



5
大危機を救う
加藤 久巳

バス利用者は、事前に事務局へ申し込みください。※弁当、軍手は各自持参してください。

申し込み方法:4月15日までに振込用紙で申し込むか、事務局へ電話、ファックス、Eメールのいずれかでご連絡ください。

5
日本のふるさとづくり
榊原 和久

6
自然が豊かな心を
育む
神谷 輝幸

流域住民で力をあわせ、ブナ、ホウノキ、ミズナラ、トチノキなど土地本来の木を植え、生態系豊かな「緑のダム」・「水源の森」をつくり、子どもたちに命の遺産を残しましょう!

6
水道水への環境税
尾崎 八郎

NPO森を再生する会 事務局:西尾市本町30番地 コスモEMタウン内

電話:0563-54-1018 FAX:0563-54-1021

郵便振替口座番号:00870-7-113816、加入者名:森を再生する会

6
森を再生する文庫
小谷野錦子

Email: emtown2002@ybb.ne.jp

美しい風景を子供たちに残してやりたい

安城学園高等学校長 坂田 成夫



一昨年「村の写真集」という映画が作られ、全国で上映運動が展開されました。この映画はダムに沈もうとする徳島県のある村が舞台になっています。避けられない運命に対し、村役場の職員は、村のすべての家族とその美しい風景を写真におさめることを決めます。役場は村の写真屋と写真家を目指して東京へ出ているその息子に撮影を依頼します。父は村の人たちの思いを理解し、病いを隠し、重いカメラをかつぎ、一軒一軒、息子と2人で険しい山道を歩きながら、写真を撮り続けます。歩くことにこだわり続ける父に「なぜ、こんな非効率なことをするのだ」と息子が食ってかかる場面も出てきますが、父は「歩いてみないと見えないことがある」とだけ答え、息子にその大切さを行動で教えようとします。

もうすぐ廃校になる小学校、山奥の家で1人暮らしをしているおばあちゃん、30名にのぼる大家族、小さな田畑を耕しながら村の生涯を終えようとする老夫婦、美しい風景に魅せられ都会から引っ越してきた若夫婦、さまざまな村の顔を父と息子は撮っていきます。1枚撮るごとに「ありがとう」と、深々とお辞儀をするのも父の流儀です。父が理解できずに東京へ出て行った息子も一緒に仕事をする中で次第に父の生き方を理解していきます。

病魔に冒された体を秘密にして撮影を続ける父も最後の1枚を残して倒れてしまいます。最後の1枚は山で働く木こりの人たちの写真です。父に撮影をして欲しいと願う息子は父を背負い、山の奥深くまで上

がっていきます。そして撮影現場に到着した親子は木こりの人たちから暖かい歓迎を受けます。

よく耕された段々畑、花が咲き乱れる山あいの小道、学校に通う子供達の姿、傍らの雑木林、そしてその背景の山、撮られる1枚1枚の写真が、ほっとさせる美しい風景です。撮られる一人一人の表情は笑顔に溢れ、生き生きとしており、美しい写真です。

“美しい風景の中でこそ美しい子供が育つ”という言葉がヨーロッパにあると聞いた事があります。ヨーロッパの街や村は何百年とそこに住む人たちの手によって美しい風景が守られていると聞きます。

戦争で破壊されたドイツ南部のフライブルグや世界遺産に登録されているクロアチアのドブロブニクの町などは瓦礫のひとつ一つを拾い集めながら元の町を再生しました。”先人から受けついで風景を未来の人たちにそのまま手渡す”が合言葉だったそうです。誇らしい生き方だと思います。

今、私たちが進めている「森を再生する会」の活動も100年先、200年先を見据えた運動です。

子供たちに美しい風景を残してやるのは私たち大人の仕事です。美しい風景を子供たちに残してやりたいと心から思います。

本年度は「森を再生する会」に多数の人たちが参加するよう、回りの人たちに呼びかけることを大きな目標にして活動していくことを決意しています。

子どもたちの声

田中 常和

段戸に子どもたちの声の響くことのすばらしさを実感します。クラスの子どもたちと間伐した枝を運び、森の中で燃やしたりしました。子どもたちは仕事とも、遊びともつかない様子で喜んで取り組みました。炎をよく見つめて、森に燃え移らないように、火を絶やさないように上手にコントロールすること覚えました。

昼食のおにぎりを食べた後は、いつも川遊びでした。冷たい川の中を行ったり来たり、飽きずに歩いているのです。時にはバランスを崩して全身ずぶ濡れになりながら歩いているのです。子どもたちは楽しい



ことを本能的に感じ取ります。自然の中で遊ぶことのおもしろさ、豊かさをだれに教えられることもなく、自分自身で発見しています。

また、段戸の森に自分たちの植えた木々に会いに行きたいです。

今年の夢

大崎 かおり

自然に帰る素材で、小屋の建設が出来たらなんと嬉しい事でしょう。段戸でゆったり自然に浸れる空間が出来ればと思います

(じつは、今でも十分穏やかで、ゆったり楽しめるのですが…。)

囲炉裏を囲み、自然の恵みに感謝しながら同じ目標を語る仲間と団欒なんて素敵だなと思います。

私に何が出来るのか?と考えると残念ながら非力です。木を運ぶこともままなりません。動かれる人に、おにぎりや温かい汁物などを差し入れできるくらいでしょうか…。片付け・掃除などならなんとか出来そうです。自分に出来るだけの協力をしたいと思います。

ともあれ、皆さんと協力して行ければ楽しい森再生の会「憩いの館」が出来るのでは?

と願う私です。

平成18年3月25日

森は生きている

副代表:杉本 勝 (岡崎市・新米僧侶)

山に森を再生する。それは、緑のダムづくり、山の森の地下に貯えられた栄養たっぷりの水は、やがて地下水となって川へ流れ出すと、流域の人々の命の水となって汲み取られ、そして海へ注がれて魚や貝。海藻を育て、私たちの命をも育む。しかし、現実の山や川や海は、地球規模で荒れ放題だ。

安城市民会議のメンバーがいち早く立ち上がった。生活環境問題から、農業・畜産、河川や三河湾の浄化等々、EM活動・植林活動・炭焼きを推進し、幾度もサミットや大会を開催していると、知らず知らずのうちに多くの心ある人たちが集まってきた。

神谷先生を中心に、森を再生しようとNPOを立ち上げた。段戸の山に斎藤さんという救世主が現れた。今は、斎藤さんのご好意で、三河の象徴、段戸の山で針葉樹を皆伐し、広葉樹を植林して緑のダムを造っている。

「三河湾で捕れたおいしい魚が食べたい。」

数年前までは知多半島の伊勢湾沿岸の海水浴場の方が、三河湾側よりもきれいだった。三河湾では赤潮が発生し多くの魚介類が死滅した。その頃私が勤務していた下山村の小学校では、臨海学習といえば、わざわざ遠くの伊勢湾側の「山海」海水浴場へ出かけていたほどである。ところが、ここ2年ほど、県の実施した海水の水質検査結果によると、伊勢湾の海水の数値が良好で、三河湾の水質が驚異的に改善されていることが分かった。篠原先生が、数年間EM活性液を注入している西浦半島付近では50cmのカレイやクロダイが釣れたそう。去年は、ワタリガニも大漁だった。

足助町や下山村でもEM菌による河川の水質浄化を目指して地域住民が立ち上がり、着々と成果を挙げている。矢作川の上流である下山村や足助町からEM菌によって浄化された水が流されれば、三河湾に注ぎ込み、きれいな海が取り戻されるわけである。そのさらに上流の段戸の山々には、再生された森のダムにおいしい水が貯えられている。

「愛・地球博」では、それらの成果を世界に発表することができた。

尺アマゴの棲む谷

斉藤 和彦

少年の日、早春の小川にアマゴの稚魚を追った。残雪の谷間の浅瀬にはすでに3センチほどに育ったアマゴの稚魚が敏捷に泳いでいて、竹のイカケで掬っては1升瓶に入れて机に飾り、泳ぐ様子を兄妹で眺めて楽しんだ。入梅に入った頃にはすでにエンドウの鞘ほどに成長した新仔(しんこ)が面白いほど釣れた。

夏休みには手製の水鏡とモリを持って毎日川にアマゴを追った。信じてはいただけないと思うが、畳十枚ほどの淵には数十匹のアマゴが泳いでいて、右に左に逃げ回り多くは泡の中に逃げ込んだが、何度となく淵の端を移動してモリを繰り出しては魚を突いた。大きな奴は岩陰に隠れていた。静かにモリを近づけ、さっと突き出すと獲物は激しく暴れて川底から赤い鮮血がゆらゆらと昇ってきた。胸がドキドキ高鳴った。水鏡の先端を水に押し付けて思わず川水を飲む。美味しかった。冷たく甘い香りがした。

お盆の頃だった。滝の下の大きな淵に棲む尺アマゴに挑戦した。捨鉢作戦だ。太めの綿糸に顎の尖った大き目のウナギ針を縛って、湿地に住む太い縞ミズを餌に付、け淵の中ほどに浮か

べて端を流木に縛って仕掛けた。翌朝暗い中に起き出して結果を見に行った。掛かっていた。尺を超す大アマゴが、白い腹を浮かべて、格闘の末命尽きたか静かに浮かんでいた。銀色に光って、鮮やかな朱点が女王の尊厳を残していた。山人はこの魚を山女とも呼んでいた。

ふるさとの山々が真っ赤に色づく頃鮭鱒類の産卵は始まる。雌雄が協力して、わずかに水が湧き出る淵尻の砂礫を掘って、アマゴたちは傷だらけになって子孫を残し命尽きていった。そしてこのドラマが展開するふるさとの山も川岸も、足音忍ばせて歩む小道さえも豊かな広葉樹に覆われていた。

尺アマゴはもういない。彼らの命を育んだクモもミズも小さな虫たちも、鳴く鳥の声さえ遠い昔のことになってしまった。今、暗く沈んだ針葉樹の森に立って、わたしは多くの生命が生きかされていた少年の日の森のことを思う。

この手で、この足で、もう一度ガブガブと水飲むふるさとの山河を取り戻したい。

昔の山に戻したい

副代表:三浦 進

今、日本の山林はかなりバランスの崩れた状態です。それによって川の水は減り、生態系はズタズタとなり理想の姿とはいえません。

この状態を元に戻す為には、何が必要かといいますと、針葉樹林に片寄った山林を広葉樹と針葉樹の混交林に変えていくことが何よりたいせつなことだと思います。

明治時代から昭和初期の山の状態を調べ、また同じ植林をしても、川沿いにはどの木が良いか、頂上付近はどのような木を植えるべきかを考え、その山、川に合った木を植え続けることしかありません。

山には熊、イノシシ、鹿、モグラ、ネズミ、タカ、カマドリ、キジ、そして多くの小鳥が遊び、川にはイワナ、アマゴ、カジカ、カジカカエル、アブラハエがあふれるように泳ぎ、そして人間の子どもの歓声が聞こえるような山や川にしたいです。

自然豊かな森づくり

森を再生する会 会計 江坂 慎也

私は、山登りを趣味の一つとしている。山の頂上から見る山々の景色もさることながら、途中の植物や樹木にも大変興味をそそられる。特に、樹林帯に入ると、まさに大自然の真っ只中に包み込まれ、何ともいえない穏やかな気持ちに浸れるのである。そんな訳で、私の夢は将来、山で暮らしたいと考えている。ログハウスのような小屋を立て、そこで森の番人として森を守りたいとも考えている。

今、「森を再生する会」では、矢作川水系の水源の森づくりを試みている。森を守ることで我々が恩恵を受けている川の水をつくるのである。そして、我がふるさと、安城にも豊かな森づくり、里山づくりをしたいと考えている。

その第1候補として、市内の小中学校の敷地に自然豊かな森づくりを考えたい。井戸を掘りソーラーシステムまたは、風力発電などのクリーンエネルギーを利用して水をくみ上げ、樹木や池の水に活用する。くみ上げた水はまた地下水となり循環するのである。そうすれば、自然に動植物が繁殖し豊かな自然を創り上げるであろう。遊具などの施設は要らない。自然の森が十分我々の要求を満たしてくれるからである。



第2候補として、市内の緑道の各拠点に自然林を植樹したいと考える。高齢化社会となり、今後、ますます介護の必要な年代層が増える。寝たきりの老人ばかりを誰が介護できよう。グリーンロードを木陰と憩いのある場所にすれば外に出る老人が増え、健康増進に役買えるのである。第3として、今後の公園づくりでは、自然豊かな里山づくりを考えたい。遊具や高価な樹木の1本1本の植樹ではなく、地元の樹木、シイ、カシ、タブなどなどの苗木を混植するようにしたい。これらの地道な取り組みにより、豊かな我々本来の自然を取り戻すことができると考えるからである。

まちにも豊かなみどりを 安城市 杉浦 彦展

「森を再生する会」に賛同する多くの人々とともに、春・秋の植樹祭に参加することができ、山の自然のすばらしさに生命の源を感じ、環境と大切さを学ぶことができました。

荒れていく山々の植生を再生させ自然の豊かな森づくりをするとともに、日々の生活の足元の「みどり」溢れる環境づくりも必要と思っております。

私たちのまちは、土地の区画整理、道路・河川・上下水道・公共施設の整備によって、生活基盤は充実してきているように感じています。これからは、自然と共生する生活が享受できる豊かな緑に囲まれた美しい都市景観を創る時代になってきていると思います。

安城市には、鬱蒼とした常緑広葉樹の原生林があるわけではなく、わずかに鎮守の森として断片的に残されている自然があるのみです。また、公園の人口に占める面積の割合も全都市の平均値より低い現状です。

一部の公園の森や、寺社林、大企業の工場の植樹帯、学校の校庭等に、大樹が繁る豊かな緑が見られることは喜ばしいことですが、他方、街路樹は、四季折々まちの景観を美しくしていますが、中には毎年、夏の終わりのころになると、秋の紅葉を眺めずして裸同然に



せていざれるところがあり、これを見ると心痛むものの一入である。台風による倒木の恐れ、落ち葉の始末、防虫消毒等の苦情があると聞き及んでいますが、これには住民が参加し、樹木の剪定、管理、育成に行政との共通の目的意識を共有することにより、問題点を解決し、美しい街路樹を育てることができるのではないかと思います。

私の夢は、大樹が連なる緑のトンネルのストリートが縦横に走り、公園には、大小さまざまな多様の樹木が繁り、小公園にはそれぞれのシンボルツリーが聳え立っている。そして、緑に囲まれた学校、事業所、工場があり、家庭の庭先からは自慢げに咲き誇る花々の景観を見ることができるまちです。

このようなまちが、環境首都を目指す「安らぎの城(安城)」の一環ではないでしょうか。こうした環境を創りあげる運動が、市民と行政が一体となって生まれ、盛んになることを望みつつ、参加したいと思っております。

「海へ」 草苺 玲子

うる覚えながら、いつも耳の底に流れている歌があります。

来まさずや わが友よ 夜の波の静けき
青き海麗しく われらをば招けり

イタリア民謡の「海に来よ」であったと記憶しています。歌い出しはゆったり流れるように始まり「わが友 海に来よ！ 楽し船を共に漕がんと」声高らかに呼びかけて終わる美しい旋律の歌です。

私がこの歌に惹かれるのは、私自身が海に抱かれて育ち、常に海に呼びかけ、そして呼ばれていたからと言えます。夏休みの真昼、A級ディンギーのパウにかかるキラキラ光る波しぶき、狭い船底に一人寝そべり、船腹に打ち寄せる波の単調な音を聞いて微睡(まどろ)んだあの時に、私は帰ることはできません。せめて海

だけでもあの千分の一にでも美しく清らかに蘇って欲しい。そして今から育つ子供たちに、私が味わった若き日の幸福感を味わってもらいたいと思っています。

あの心から愛した海的美しさを壊したのは私達にほかなりません。この半世紀の間の無関心への罪を償うことは長い時間を要することと思います。今は暗い風も吹き抜かないスギ・ヒノキが密生する水源の森を、混交林にすることが、ふるさとの海を再生することと知りました。自然への感謝の気持ちをこめて少しでもお手伝いしたい。後から来る世代への責任を少しでも果たしたい。それが私の夢……………。



大危機を救うための「森を再生する会」の活動

加藤 久巳

矢作川上流の新豊田市山間部に放置され、荒廃しているスギ、ヒノキの人工林は、全山林面積の55%近くを占めていると聞く。この森では酸性雨被害と無間伐で日が入らないため、集中豪雨が降れば沢抜け等で山が崩れさる現象が、あちこちで起こる危機的様相だ。さらに温暖化による異常気象は、集中豪雨量を現時点ですでに30%も増やし、これからはもっと増えるという予想だ。

従って間伐をここ10年位の間に行き渡らせないと、赤膚の山が広がり森林面積が半分もない貧弱なものになってしまう。緑のダムであるべき山林が赤い砂漠となってしまう。これでは伐採ばかりを続けた発展途上国の山となら変わりはしない。農業、工業、生活用水も、洪水と渇水が極端になり水資源の確保ができず、三河湾も山からの大量な有機物で汚れ尽くし、赤い死の海と成り果てる末期症状となる。

以上の大危機を防ぐために、「森を再生する会」が率先的に、危機から脱出する活動をなすことができれば、これは大変価値のある余生となると思う。(案はいろいろ考えられる。)

そのための方法を早く決断し、どしどし実行したいと思う今日この頃である。

こんな重要なことを決して夢で終わらせてはいけないのだ。これをなすのが「森を再生する会」ではないだろうか。



日本のふるさとづくりをしましょう 榊原 和久

日本のふるさと、山、木、川、炭焼き、そして山の幸と澄んだ空気と美味しい水がふんだんにある、段戸山の斎藤さんの土地で、保水力のない針葉樹林を広葉樹との混交林に変えた所の生長を待ちながら、他の林を混交林に変えながら、間伐した木を使って、木の香りのする21世紀型の循環型山小屋をみんなの力で建てて、満天の星を眺める幸せを楽しみたい。

地球を大切に、未来の子どもたちが生きた自然に触れ、地球を守り、人にやさしくなってしまう日本人のふるさとをつくりたい。

電気はソーラーシステムと風力による自家発電、ランプも用意して、水は自然の山の水、火は囲炉裏と七輪、そして薪ストーブがあればさらに楽しい。予備に豆プロパンも用意しておく。風呂はソーラーと薪で焚く。ライフラインのない生活。

風呂、トイレでEMをどんどん使って、段戸山から豊川を浄化して三河湾で最悪の汚染地帯を改善する。さらに空地にEM培養1トントン

クを設置して、豊川の水源からどんどんEMを流して変化を楽しむ。

周辺の畑でEMらくちん農業をして無農薬野菜の鍋をみんなで囲む。なぜか料理番は男性が張り切る不思議な雰囲気。テレビのない夜のひとときを楽しむ空間づくり、みんなの工夫・日本の良さを実感できる場をつくりたい。

大工の得意な方・好きな方、土台づくり、畑づくり、創意工夫の好きな方、アイデアいっぱいの方、実践が得意な方、お金を人のために使いたい方、人を喜ばせたい方、料理の得意な方、自然に触れたいだけの方など、とにかく集まりましょう。

そしてみんなでツリーハウス、自然を活かした遊具を作ったり、わらじづくり教室、木工教室などの伝統技術を伝えたりして、後世に日本本来の本物を残し、伝えましょう。

自然が豊かな心を育む

理事長 神谷 輝幸

私の家の近くの人気スポット「堀内公園」で、二組の親子(子どもは小学校2年生)が遊びの待ち合わせをした。一人の親が乗り物のチケット千円分を買ってきて、もう一方の親に

「これを使ってください。用事で私はでかけますので。」

もう一方の親は

「もらうわけにはいきませんので、今日はお金を持ち合わせていないので後で払います。」「そんな心配は要りませんよ。」

これを聞いていた子どもが言った。

「お金の要らない物で遊ぼう！」

そして子どもたちは、動物のいる方へ走っていった。川の堤防に生えている草を摘んで鳥たちに与え、動物と堤防の間を何回も行ったり来たりして楽しそうに時を過ごしていた。

春まだ遠い2月、氷雨の降る中を我が孫たちは、雨だれを求めて洗面器やバケツを置いて雨水をためている。たまった水を一か所の大きな器にためては庭を走り回っている。髪の毛や衣服が濡れても走り回っている孫をガラス越しに家族はほほえましくも風邪を引かないか心配しながら窓越しに眺めている。冷えた身体を風呂に入れて温めてやろうか、ストーブで暖めてやろうかと思案しながら……………。

これは最近見かけた光景である。子どもたちは自然が大好きである。そこに溶け込んで夢中になって遊ぶ。大人は何も用意しなくても子どもたちは少しも退屈しないで遊ぶ。私たちが遊んだ自然とは質・量ともに貧弱になった自然だけれども子どもたちはけなげにも創造性豊かな遊びを工夫する。

私たちは段戸山において本来の自然を取り戻すために、作業している。ブナ、ミズナラ、ホウノキなどその土地に本来生えていた木をできるだけたくさん種類植えている。多様な森は多様な生き物を育み豊かな自然がよみがえる。小鳥や猿たちも実のなる木を求めてやってくるだろう。自然の動・植物園だ。家族づれでやってきた子どもたちも豊かな自然で豊かな心を育んでくれるだろう。そして、小さな庵を結び、炭火をおこし、大人たちには都会の喧噪から離れて心を休める場所を提供したい。これが私の夢である。

水道水への環境税で植林を

西尾市 尾崎 八郎

私の夢は、豊田市が実施しているように、水道水1トンにつき1~2円の環境税的に徴収して山林管理農家の生活保障をして、みどりのダム造りを進めていくことです。川の下流域に棲む私たちは上流域の山林が自然林的な正常であってこそ、生活が成り立っているのです。山林管理農家がいなくなった最近事情を知るなら、自ら山に行き管理しなければならぬと思います。スギやヒノキの人工林の放置で保水力が最悪になっているからです。

この提案「水道水の環境税方式」は市民の理解が殆ど進んでいません。普通の市民は蛇口をひねれば『水』が簡単に得られるので何の問題意識もありません。川の水位がいつも低く、少しの雨でも水がにごり、大雨になると洪水を心配し、一気に海に流れ込む現状を当然と見て何も気付いていないのです。



山がみどりのダムになっていた昔の自然林だったら、それが解決されるのです。そのためには、下流に住む人々が山に行き人工林の荒れた現状を知っていただく必要があります。

平成18年度年会費納入のお願い

本年度年会費を下記の金額の通り、同封いたしました振込用紙にてご入金いただきますようお願いいたします。なお、平成18年度総会(4月22日開催)時には、現金での納入を受け付けいたします。お手数をおかけいたしますがよろしくお願いいたします。

年会費 2,000円

(振込口座番号は1ページ)

理事長 神谷 輝幸

編集から 森を再生する文庫

小谷野 錦子

3月になってもテレビは雪に埋もれて、雪崩の危険におびえながら一人で暮らしているお年寄りの姿を映し出していました。私はこの姿を見ると、さぞつらい思いをしておいでだろうと、胸がいつぱいになります。さびしい里山に安心して住める自然と人々の賑わいを取り戻したいものです。

さて、第14号会報では、13名の会員が森再生に懸ける熱い想いを書いてくださいました。編集するにつれて、皆様の知恵や情熱が伝わってきました。

私は30年前、「明治用水」毎日新聞社を読み、矢作川流域の人々が川を守った歴史を知ったのが、環境問題へ取りかかった始

めでした。当時、矢作川沿岸水質対策協議会事務局局長をなさっていた内藤連三先生他多くの方から、直接お話を聞き、教えていただきました。先輩たちは、貴重な書物や資料を残されましたから、それら書物や資料を集めて「森を再生する文庫」を作りたいと思います。文庫はさまざまな分野の研究や教育に役立つでしょうし、そこで研究会を開き、討論することもすばらしいと思います。一人でできて書物を読み、自然に触れ、心を休める方もあるかもしれません。

皆様のご感想、ご意見、夢の続きををお寄せ下さい。お待ちしております。E-Mail: kinko@luck.ocn.ne.jp
Tel&Fax: 043-275-0877 編集委員会